

# 子どもたちが見方を変えて行く時

——三歳児の育ちの中から——

山路純子

「おはようございます。」

「先生、僕ですよ。」

園舎の角を曲って昇降口へ走って来る子供たちを出迎える言葉を交わしながら、今日はどんな遊びが展開して行くだろうか予想をする。

「昨日、水族館でイルカショーを見て来たよ。ジャンプをしたりボールも投げたよ。」

「おばあちゃんの所へ行って来たの。」

こうした言葉が、その日の活動のきっかけとなる事が

多い。既に準備して置いた保育室の遊具・用具の配置に目をやりながら、子供たちの活動の糸口をどこから開いて行ったら良いかと考えを巡らす。子供たちの姿がコマ送りの映像を見るように現れては消えて行く、緊張する一日のスタートの一瞬でもある。

身支度を終えると、すぐさま昨日の続きの積み木の基地に入り込む子供、友達の様子をじっと見ている子供、保育者に要求をぶつけて来る子供など遊びに取りかかる姿は様々である。間もなく子供たちは遊びに没り、活動

が渦を巻くように広がって行く。

毎日繰り返されているこうした活動の記録を見直して行くと、そこにはいくつかの変化期を見つけ出す事が出来る。子供たちが遊びに取り組む姿に……言い換えれば子供たちが自分を取り巻く様々な環境に対して働きかけて行く姿の中に、子供たちの見方・考え方の変化をとらえる事が出来る。ここでは、三歳児の事例をもとに育ちをとらえて行く事にする。

### 〈囲いの中から外を見る時〉

入園して間もない頃、子供たちは保育室がとて広く感じるらしい。おもしろそうな遊具を見出し遊び始めても、誰かが側にやっていると不安定になる。邪魔をされずにとっぷりと遊びに浸れる場を求めて来る。壁面を利用して、木枠や柵などで囲った小さな家が蜂の巣のようにいくつも作られる。囲いの中は一時子供たちの楽園となる。しばらく、この囲いの中の遊びに安定した子供たちは、外の様子がとても気になり始めるのである。囲

いの家を足場として外に出て行つては、新しい遊具を見つけ出し持ち帰って来たりする。この頃になると、段ボールで作った囲いの壁に窓を開ける事を喜んで承諾するようになる。出入口になる側面を保育室の中央に向けて開閉する事にも同意をし、自分から「ピンポン」と呼鈴を付けて欲しいと言いつつ、ミカン箱を利用した靴箱を作るとそれを玄関に置いて友達が来るのを待つようになる。

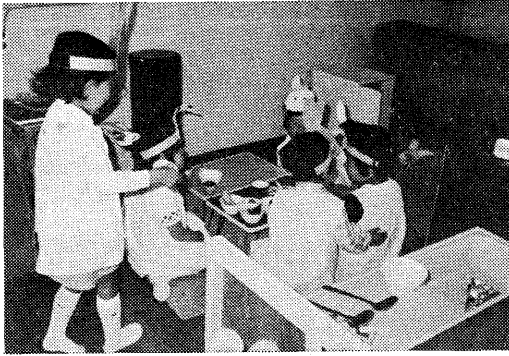
次第に、子供たちはもっと大きな家にしたいと要求をぶつけて来るようになる。囲いはそれまでのように頑丈な必要はなくなり、ほんの側面覆つていれば十分となる。子供たちの目には、遊具の配置や立体構成をひとつの塊りとしてとらえられるようになり、見えない囲いに気づくようになって来るからでもある。

### 〈お面を被って遊び始める時〉

友達とのかかわりを強く求め始める五〜六月頃、子供たちは「違い」を意識するようになる。逆に言えば、

「同じ」という事は、それだけで仲間にもなり得るのである。

この時期になると、子供たちは毎年お面を要求し始める。お面と言っても、厚紙に子供の要求する絵を描く、それを頭に被れるようにしただけの物である。子供たちは、動物のお面を特に好む。表情にもとても敏感で、保育者が描き終わるまで手元をじっと見つめていて、形に



▲うさぎのおうち

注文をつける。例えば、「笑っている目にして。」とか「〇ちゃんと同じに歯の見えるウサギがいい。」などと言うのである。出来上がったお面を被ると早速動物に変身である。イヌ語やネコ語でのお喋りが保育室に響きわたる。

お面を被る事によって、子供たちは今までの自分でなくなり、大いに力づけられもするようである。同じお面を被ってさええすれば、なかなか入れてもらえなかった遊びにも、すんなり入り込む事が出来ることに気づいて来る。このように遊びへ入るきっかけを失わせないようにするため、即座に要求に応えられる準備が必要となつて来る。

「耳の中をピンクにして。」と拒否されて来たお面の手直しにも忙しくなる。お面は、仲間としての条件づけともなる。

可愛らしい動物のお面がほぼ出揃う頃、子供たちは図鑑を持ち出して来て恐竜やマンモスなど恐しそうに見えるお面を作ってほしいと要求して来る。お面を被ると異



▲恐竜の仲間

様な鳴き声を発しながら、強さを示すかのように、歩き回る。男の子が、自分の力が強い事を相手に知らせながら仲間作りをする時期に入る頃、こうした強い動物に変身する姿がよく見られるのである。

お面は、子供たちにとってどのような意味を持っているのか、次の言葉から想像する事が出来る。

ノリオは、クマのお面を被り続けていた。魅力あるアツシの仲間へ幾度となくはじかれながらも、やっと入り込む事が出来るようになった時の保育者との会話である。

「お面は被らなくなったって仲間に入れるんだよ。」「おもしろい時には、お面なんか被らないよ。」「お面を被るの赤ちゃんはいよね。」

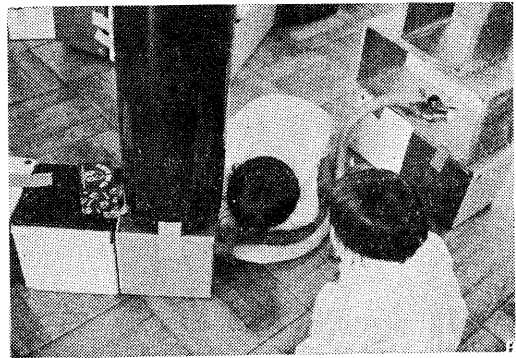
そう言いながら、使い慣れたクマのお面を箱の中にそっとしまいこんだ。まるで別れを惜しむかのように、お面に小さく手を振るノリオ。「バイバイしてんだ。」と照れたように笑うと、アツシの基地に走って行ったのである。自分の力に自信が持てるようになる頃、このお面も必要がなくなり、戸棚の奥にしまわれる。

#### 〈本物らしさを求める時〉

子供たちが、友達とのかかわりを楽しみむようになる頃（十月）から、遊びに行き詰まりが度々見られるようになる。それは、仲間として心をつなぐ力がまだ育つ

ていないからである。このような時に、子供たちの遊びに入りこんで、つぶやきに耳を傾けていると、発展して行くと思われる活動の糸口を探り出す事が出来る。子供たちは、自分の描くイメージを想像の世界に留まらず、実際の物に近づけてみたいと思いついて、事に気づく。

大型積み木で自動車を作っていたヤスオは、「この車、動かしたいな。」と独り言を言った。「ガソリンが入っていないからじゃないの？」と声をかけるエミコ。早速太いホースを探し出して来て、ガソリンスタンドを作る。今まで、走らなかった積み木の自動車は、ガソリンスタンドを基点に動き始めた。一本のホースが、子供たちがよく見ている本物のスタンドのホースに似ていたから、共通のイメージを容易に持つ事が出来たのであろう。遊びは、更に洗車場、修理工場作りへと広がって行ったのである。子供たちの本物らしさを求める心の芽ばえを見る頃、保育者は、子供と知恵を絞る合う準備に忙しくなる。子供たちが今こんな遊びを始めたからきつとキャン



▲ガソリン満タンですか

プごっこを始めるだろう。そのためには、キャンピングカーについて知識を得ておかなければならない。園のワゴンを使えば、キャンピングカーが出来るかもしれない……などと。

この時期は、子供と保育者が共に遊びを創り出して行く時と言える。子供たちは、自分たちの考えた事が遊びに生かされて行く事を知り、もっとおもしろくするため

にアイディアを保育者へぶつけて来るようになる。

### 〈パノラマになる時〉

子供たちの物の見方に大きな変化期が訪れる。(一月頃)これは、ある時突然にしてやって来るかのように見える。少し前までは、子供たちは、自分と物とが一体となり切り離れたとらえ方はほとんどしていない。それがふとしたきっかけから、物から自分を一步離してとらえるようになる。こうした姿が子供たちの活動の中に現れ



▲高速道路をつなげるよ

て来る時、成長の階段を実際に目にしたような感動を覚えるのである。

ユウキが小箱で作ったシマウマ、「これ、本当に立つから動物園作りたい。」と見せる。「キリンを作ったら動物園に入れて。」とアイ。次々と子供たちは広い動物園に、自分の作った動物を置く。「動物園まで、高速道路を続けるからね。」ヒロアキは段ボールの切れ端を立体的に組み合わせようと工夫をする。保育室の中の遊具は隅に寄せられ、そこには一つの町を見るように遊びは広がって行ったのである。これは小さな町のパノラマを見るのに似ているので、この時期の訪れをパノラマになる時と名付けている。子供たちは、自分の作った物をしばらくパノラマの中に置いた。直に持ち帰る事をせず、広い視野の中に、自分の作った物を収めてとらえる事を楽しんでいたのである。これは今までずっと、ハイハイをしていた赤ちゃんが、立って歩くようになった瞬間、その視界が大きく広がり全く違った物を見たような新鮮な驚きに似てはいないだろうか。

この姿が見られるようになる頃、子供たちの遊びに客観性が増加して来る。毎年、必ず訪れて来るこの変化をとらえようと息を詰めながら待ち受けている。保育室の中では、質の違った活動が絡み合いを見せながら、四歳児の春を迎えるのである。

### 〈子供の育ちを見つめて行く中で〉

これまで、子供たちが育つ過程でのいくつかの大きな変化期について述べて来たが、これらの変化を見つめて行く時に、保育者として心にとめて置きたいと思つている事について触れてみたいと思う。

#### ―見守る―

うまく遊び込んでいるかと思うと、友達からはじかれていつの間にか一人になってしまう事がある。一人になりながら、その子供は友達との遊びをじっと見つめていく。私は、子供たちが良く見せるこうした姿を特に大切に见守る事になっている。共にかかわったりはしていないのだが、一歩離れたこの位置からは動きの総てをとらえ

る事が出来るのである。心の中に様々な貯め込みがなされた時、子供の方から動き出したいと言うサインを送つて来る。その時が来るまで、子供の近くから見守るようにしながら待つのである。子供自身の中に力が貯えられ、周囲をとらえる目にも変化が出て来た時に、弾みをつけて今の状態から脱け出して行くのである。この見守りとは見極めは大切な意味を持つて来る。

#### ―揺さぶりをかける―

子供たちの活動は、非常にうまく展開して行く時と、どうにも発展性がなくなつてしまふ停滞の時とを絶えず繰り返しているように思う。クラス全体が停滞の状態に入り込んでしまった時には、小さな波を立てて、停滞のバランスを崩す揺さぶりをかける必要がある。

例えば、今使っている遊具・用具の質や量の検討である。充分にそれで楽しんだと思う時には数量を減らしてみる。それまでに見られなかった葛藤の場面が生じ、いかに自分が多く獲得しようかと知恵を働かせる姿が見られ、力で或いは言葉でなんとか相手を納得させようとす

る様子が見られて来たりする。

また、毎日繰り返されている事への保育者自身の積極的な反省もひとつの揺さぶりとなる。そこに新たな発想を加えて行く事により全く異なった思考の場が生まれて来たりもする。安定した状態が続いている事に対して、保育者自身に揺さぶりをかけねばならない。

#### ―場を整えて行く―

遊びの場、位置、その境界が、活動に大きく働きかけるものである事も見逃せない。保育室の中央に位置づいた基地は、誰の目にも優位な存在として映る。しかし、どこかが崩れて来るとその力を失い、そこに加わる子供たちを結びつける強さを無くして来る。

活動は、物とそれを取り巻く空間があつて成り立つ。子供たちの目にも、物の存在がしっかりととらえられなければ、まともにも無くなる。もし、空間となるべき所に、紙屑でもブロックでも散れて、物と物との境が見分けられなくなつて来ると活動そのものも次第に停滞して来る。同時に、加わる子供たちの思考も停滞して来るの

であるから興味深い事である。散れた場を整える事により、その中で子供たちはお互いに仲間として意識し合い結びつきを強めて行くのである。遊びの場、その配置が持つ意味についても絶えず見直しをして行く必要がある。

子供たちの帰った後、保育室の片付けをしながら、今日の保育を振り返る。製作コーナーにじっと座りつきでいたソノコの姿が浮かんで来た。ここずっとこの場に逃避するかのように入り込んでいる。明日は、必要が出て来たら、このコーナーは出す事にしよう。私の頭の中には、ソノコのチナツを追う目の輝きが甦って来た。非常にスローなテンポではあるが、チナツたちの遊びへ入り込んで行く姿が続いて映る。明日は、どんな揺さぶりをかけてみようかと思ひ巡らしながら、保育室を整えて、明日の子供たちの登園を待つ。

(茨城大学教育学部附属幼稚園)